

食育学習懇談会概要

～ 庄内ふるさと ほっと塾「食”する力をつけよう！」 ～ 地域発～市・県・日本の食育！

食育学習懇談会は、「食」について健全で安心な食生活を摂れなくなっている現状と食料自給率が低下した食料事情を省みて、様々な食育の推進の観点から、国民一人一人が“食”する力をつけられるよう、庄内地区公民館が実施した子供たちへの食生活アンケート結果や市・県・国の食育事例及び教育ファームの実践例等を紹介し、事例発表者をパネラーとしたパネルディスカッションと質疑応答を実施しました。

【開催概要】

- 1 日 時 平成22年 2月16日(火)
13時00分～15時50分
- 2 場 所 松本市出川 庄内地区公民館大会議室
- 3 主 催 関東農政局長野農政事務所地域第一課
庄内地区 食と健康を考える会
(庄内地区公民館 文化委員会 子育て委員会 庄内地区子ども会育成会)
(庄内地区健康づくり推進員会 庄内地区食生活改善推進協議会)
- 4 参加者 一般市民 35名(マスコミ3社)
- 5 概 要

主催者あいさつ

松本市庄内地区公民館長 大輪 敏雄氏

この公民館では、館長の私や主事が企画した講座というものはありません。地域の方々の要望が形になった講座だけです。この講座も地域に吹いた「食”への関心」という風が、この講座が開催されるに至りました。

様々な現場の取組を一度に聞くことが出来る数少ない機会だと思います。一緒に学習したいので、よろしくをお願いします。

事例紹介及び質疑応答

「データでみる 健康長寿・長野県の食文化」

講師 松本保健福祉事務所健康づくり支援課 飯澤 裕美氏

質問：なぜ30～40代の男性の野菜摂取量が多いのでしょうか？(50代女性)

回答：今後、改めて分析したいと思いますが、一般的に男性の方が食べる量そのものが多いからかもしれません。

「秋のつどいで行った食生活アンケート」

報告者 庄内地区健康づくり推進員会 中嶋 順子氏



「“食”する力をつけよう！ - 地域発～市・県・日本の食育！」
説明者 関東農政局長野農政事務所地域第一課

「教育ファーム実証モデル事例紹介」
事例報告者 バジルクラブ代表 鈴木 達也氏

「松本市内の食育について」
講師 松本市学校給食課栄養教諭 中嶋 恒子氏

パネラーとの意見交換

60代女性：

「30年近く前、給食センターでは化学調味料等を使っていたことや、前日に野菜のカット処理をしていたと聞かされていきました。学校給食の栄養面や衛生面に不安を抱いたままだったので、今日は煮干しから出汁を摂っている現状等を教えていただき、大変嬉しく思いました。野菜等の管理についてもどのようにされているか教えて欲しい。」

中嶋氏：

「衛生面には十分配慮しています。野菜類をカットして長時間放置することは、衛生面・栄養面からもよろしくないなので、当日処理を基本としています。ただ、限られた調理員数で運営しているので比較的傷みが遅い根菜類は前日にカット処理することもあります。」

60代女性：

「バジルクラブの取組みについて感動しました。もう少し早く知りたかったと思います。バジルクラブの具体的な活動内容を教えてください。」

鈴木氏：

「バジルクラブは、環境や自然に配慮しながらこだわりと信念を持ってものづくりをしている生産者会員と、安心して食べられる食品を...と考えている消費者会員の交流を進めている任意の団体です。」



特に規約とかは設けていませんが、小さい農家が多いので、会員の皆さんから援農してもらい合鴨米や減農薬米の生産、販売しています。野菜や加工品等も扱っています。」

70代女性：

「“教育ファーム”の取組みは素晴らしいことだと思いました。やってみたいと思うのですが、補助金等、助成は受けられるのでしょうか？」

長野農政事務所：

「今年度まで、実証モデル事業として、国から委託された団体(農文協)を通じて、教育ファームを推進するための助成を行ってきましたが、22年度は“食の安全・安心交付金”という事業予算のなかで、教育ファームの推進を図ると聞いております。国会で予算案が審議中で、具体的なことは全く決まっておられませんので、ご理解ください。」

70代男性：

「自給率の低下を懸念して、低学年から農業体験等をする必要を感じている。食べ残しを減らさなければいけない。学校給食の現場はどんな様子か？」

中嶋氏：

「食べ残しは、発生しています。おかずは子供たちが分けあって食べているようで、それほどありません。一番の問題は主食の“ごはん”です。以前、多い時は一校で10kgになることもありました。この量はおかずによって多い少ないがあるようでしたので、現在はこれほど多くはありません。今後もいろんな策を考えて、成長期に必要な炭水化物をしっかり摂ってもらえるよう工夫したいと思います。」

50代男性：

「給食現場で子供たちが融通し合って消費しているものとして牛乳がある。全体としては残してはいないようだが、一人で2～3本飲む子がいるのに対して、全く飲まない子もいると聞いている。ごはん給食が増え、和食中心のメニューになることから牛乳が飲まれにくくなっている。

牛のエサを外国に委ねている実情、自給率の問題から考えても、あえて給食に出さなくても良いと考える。それぞれの立場で考えを聞かせていただきたい。」

中嶋氏：

「全国的に減らしている学校もあると承知はしていますが、成長期に必要な栄養素ということでメニューに入れていきます。和食でも牛乳を飲むのは食後で構わないと思います。」

飯澤氏：

「牛乳はカルシウム含有量とその吸収性に優れています。栄養調査では、給食が無くなった15歳頃からカルシウム摂取量が減っているというデータがあります。このことから、将来の骨粗鬆症等を予防する観点から、給食で牛乳を飲んでおくことは大切と考えます。」

鈴木氏：

「昔の日本人は牛乳を飲むことは少なかったと思います。栄養素的なことはよくわかりませんが、土壌にはカルシウムばかり入れても植物はカルシウムを多く吸収する訳ではありません。他の栄養素も取り入れて成長をするので“どうなのかな？”というのが正直な気

持ちです。」

長野農政事務所：

「少し前のデータですが、牛乳・乳製品の自給率は、68%です。国産飼料による生産分は全供給量の28%で、肉牛の11%に比べ高くなっており、牧草など国産飼料を比較的多く使っていることがうかがえます。」